

論文内容の要旨

申請者氏名 清水 暁美

論文題目

臨地実習指導における看護系大学教員の連携遂行行動に関する研究

1. はじめに

看護基礎教育において、看護実践能力を育成するために必要不可欠な臨地実習では、看護師教育を実施する機関の急速な増加に伴う実習施設の確保や、実習指導における看護系大学教員（以下教員とする）と臨地実習指導者（以下実習指導者とする）との連携の在り方など、新たに臨地実習の指導体制に問題を生じさせている。

また、臨地実習指導（以下実習指導とする）に関する先行研究では、教員と実習指導者との連携不足が指摘され、両者の連携・協力体制を教員がいかに構築できるかが重要であると述べられている。しかしながら、両者の連携に際して、教員の側に期待される連携遂行するための行動（連携遂行行動とする）を構成する要件、さらには連携遂行行動に関連性を示す要因に注目した研究はほとんど見当たらない。そこで、本研究では、実習指導における教員の教育力の向上に資することをねらいとして、実習指導における教員の『教師効力』と『連携遂行行動』の関連性について明らかにすることを目的とした。

2. 方法

本研究の目的を達成するために、『教師効力』が『連携遂行行動』に関連すると仮定した演繹的仮説（因果関係モデル）を構築し検証することとした。

【研究1】実習指導における教員の『教師効力』を測定するための尺度を作成し、妥当性と信頼性の検討を行った。

【研究2】『連携遂行行動』を測定するための尺度を作成し、妥当性と信頼性の検討を行った。

なお、研究1と研究2の尺度開発に用いた分析方法には、多分相関係数の算出、探索的因子分析、構成概念妥当性の検討を確認的因子分析、信頼性の検討は ω 信頼性係数を用い、モデルのデータへの適合性の判定にはCFIとRMSEAを採用した。

【研究3】『教師効力』を独立変数、『連携遂行行動』を従属変数として構造方程式モデリングを用いてモデルのデータに対する適合性と変数間の関連性を検討した。また、統制変数「年齢、性別、職位、看護職経験年数、教員経験年数、および付設する実習施設の有無」を因果関係モデルに投入し検討した。モデルのデータへの適合性の判定にはCFIとRMSEAを採用した。

3. 結果

【研究1】実習指導における教員の『教師効力』では、【カンファレンスを進める自信】【実習指導を行う自信】【学生を尊重する自信】【看護実践ができる自信】の4因子を第一次因子、『教師効力』を第二次因子とする4因子二次因子モデルのデータへの適合度は $\chi^2(df) = 224.302(86)$ 、CFI = 0.967、RMSEA = 0.062であり、統計学的に許容範囲にあった。また、 ω 信頼性係数=0.884と良好であり、統計学的に支持され、『教師効力測定尺度』を開発することができた。

【研究2】『連携遂行行動』では、【実習指導者との情報共有】【学生の看護実践への支援】【実習指導者との関係づくり】【実習指導者以外の看護師や主治医との調整】の4因子を第一次因子、『連携遂行行動』を第二次因子とする4因子二次因子モデルのデータへの適合度は $\chi^2(df) = 346.321(166)$ 、CFI = 0.973、RMSEA = 0.052、 ω 信頼性係数=0.899であり、4因子二次因子モデルの構成概念妥当性と信頼性が統計的に支持され、教員の実習指導における『連携遂行行動測定尺度』を開発することができた。

【研究3】『教師効力』と『連携遂行行動』の関連性を、『教師効力』を独立変数、『連携遂行行動』を従属変数とした因果関係モデルを仮定し、構造方程式モデリングを用いてモデルのデータに対する適合性と変数間の関連性を検討した。その結果、分析モデルのデータに対する適合度は、 $\chi^2(df) = 1234.508(749)$ 、CFI = 0.959、RMSEA = 0.041であった。因果関係モデルのデータに対する適合度は概ね許容できる範囲にあり、『教師効力』と『連携遂行行動』との間に正の関連性（パス係数：0.680）を示すことが明らかとなり、『教師効力』と『連携遂行行動』との因果関係を検証することができた。なお、モデルにおける『教師効力』の『連携遂行行動』に対する説明率は47.0%であった。

4. 考察

実習指導に必要な教員の『連携遂行行動』を促進するためには、教員の『教師効力』を高めることが重要であることが明らかとなった。また、教師効力測定尺度および連携遂行行動測定尺度の活用は、教員と実習指導者との連携遂行を行動化するための方向性を示す指針となることが示唆された。

さらに、本研究で開発された尺度は、教員自身の実習指導における自己評価や、実習指導における教員の連携遂行行動の可視化を可能にした。このことにより、教員は実習指導における連携遂行に関する目標を明確にすることができ、実習指導者と実習指導の目標を共有することが可能となり、連携遂行行動の円滑化に役立つことが示された。そして、実習指導に携わる教員の教師効力を高め、実習指導者との前向きな連携遂行を行動化することは、結果として効果的な実習指導になることが示唆された。

発表論文

- 1 清水暁美, 出井涼介, 太湯好子, 中嶋和夫: 臨地実習指導における看護系大学教員の教師効力測定尺度の開発, ヒューマンケア研究学会誌, 6(2), 1-7, 2015
- 2 清水暁美, 實金栄, 出井涼介, 太湯好子, 中嶋和夫: 臨地実習指導における看護系大学教員の教師効力と連携遂行行動の関連性, 川崎医療福祉学会誌, 26(2), (2017. 4. 掲載予定)

氏 名 : 清水 暁美
学位の種類 : 博士 (保健学)
学位記番号 : 甲第保-21号
学位授与の日付 : 平成 29 年 3 月 22 日
学位授与の要件 : 学位規程第 4 条第 3 項該当 (課程博士)
学位論文題目 : 臨地実習指導における看護系大学教員の連携遂行行動に関する研究
論文審査委員 主査 : 河村 顕治 副査 : 古城 幸子 副査 : 長町 榮子
審査結果の要旨
<p>I. 論文概要</p> <p>本研究の目的は、看護系大学教員の教育力の向上に資することをねらいとし、実習指導における教員の教師効力と連携遂行行動の関連性について明らかにすることだった。</p> <p>序章では、看護系大学の急速な増加をもたらす実習施設の確保、実習指導における教員の実習指導者との連携のあり方など、実習指導体制に関する問題状況を文献により明らかにし、研究の目的と理論的枠組みを示した。</p> <p>第1章では、実習指導における教員の教師効力測定尺度の開発を目的に、【カンファレンスを進める自信】【実習指導を行う自信】【学生を尊重する自信】【看護実践ができる自信】の4因子で構成される教師効力測定尺度の妥当性と信頼性の検討をした。結果、4因子二次因子モデルの構成概念妥当性および信頼性は統計的に支持された。</p> <p>第2章では、教員の実習指導における連携遂行行動測定尺度の開発を目的に、【実習指導者との情報共有】【学生の看護実践への支援】【実習指導者との関係づくり】【実習指導者以外の看護師や主治医との調整】の4因子で構成される連携遂行行動尺度の妥当性と信頼性の検討をした。結果、4因子二次因子モデルの構成概念妥当性および信頼性は統計的に支持された。</p> <p>第3章では、実習指導に携わる教員の教師効力と連携遂行行動との関連性を明らかにすることを目的に、教師効力を独立変数、連携遂行行動を従属変数とした因果関係モデルを仮定し、構造方程式モデリングを用いて、モデルのデータへの適合性と変数間の関連性を検討した。結果、教員の教師効力が連携遂行行動に関連性を示すことを明らかにした。教員の教師効力を高めることが臨地実習に必要な連携遂行行動を高めることになることを明らかにした。</p> <p>終章では本論文の総合考察を述べた。開発された教師効力測定尺度および連携遂行行動測定尺度は、教員自身の実習指導における自己評価 (教師効力) や連携遂行行動の可視化を可能にした。このことにより、実習指導における連携遂行行動の向上に関する目標の明確化や実習指導者と実習指導に関する目標の共有が可能となり、連携遂行行動の円滑化に貢献できることが示唆できた。</p> <p>II. 審査結果</p> <p>以下の理由で、全員一致で本研究が博士論文に相応すると判断した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護学の発展に欠かせない臨地実習の充実に関する研究であり、教員の教育力の向上に寄与すると思われる。 2. 当該テーマに関する先行研究について十分に検討し、立論に必要なデータや資料の収集が適切になされている。 3. 研究方法は妥当であり、研究目的の達成のために取られた方法は、分析方法も含め、適切であり、査読付きの学術雑誌に掲載された。 4. 研究目的が明確であり、論旨は一貫している。また、現在の看護教育での課題に合致した研究であり、得られた知見は学術的発展に寄与すると判断できる。 5. 全国の看護系大学の教員を対象とした研究であり、倫理的な配慮は適切になされている。 6. 論文の文章は十分に吟味されており、要旨、目次、章立て、引用、図表に関して体裁が整っている。